

桜の巻

日本には「花と言えば桜」という人が多いのですが、桜は日本原産ではなくて、シベリア、日本、中国、米国・カナダなど、主に北半球の温帯に広範囲に自生しているのだそうです。日本にはオオシマザクラ、ヤマザクラ、エドヒガンザクラ、クマノザクラ、カンヒザクラなどといった 10 種ほどの野生桜しかなかったのですが、バラ科サクラ亜科サクラ属に属する桜の「変異しやすい」という特質を活かして日本人が歴史的に熱心に種間雑種を作り上げ 200 種(数え方によっては 600 or 800 種)のサトザクラ群を作り出したことが、「桜王国・日本」と桜見文化ならぬ「花見文化」を作り出したのですね。

枝垂桜系でも、神奈川県名木百選に指定されている長興山紹太寺(小田原市入生田)の枝垂れ桜(下左)は野生桜のエドヒガンですが、山高神代桜(山梨県北杜市)、根尾谷淡墨桜(岐阜県本巣市)と並んで日本三大桜の一つとされる三春滝桜(福島県田村郡)(下右)は、エドヒガンザクラ系の栽培品種であるベニシダレザクラ(紅枝垂桜)です。三春滝桜は樹齢 1,000 年超ですから、1,000 年以上も前から日本人が野生種桜から栽培品種桜を産みだす試みをしていたということが分かります。



伊豆の河津町を流れる河津川の兩岸をピンクの花びらで埋め尽くす河津桜の姿は実に見事です、これもオオシマザクラとカンヒザクラの交配種です。伊豆半島の先端部に近い東側地域の一角を占め、太平洋に面する河津町は、早咲きのため例年 2 月上旬から約 1 カ月間行われる「河津桜まつり」に 100 万人もの花見客が訪れる屈指の花見ポイントになっています。河津桜は転地性も強いのか近年は松田町の松田山ハーブガーデンをはじめあちこちに植え付けられ、咲き誇る花で「早くも春来たる」の感をもたせてくれています。



この河津桜が日本で一番の早咲き桜だと思っていたのに、昨年 1 月に熱海梅園を訪れた時に糸川沿いに満開の熱海桜が立ち並んでいるのを見たのは驚きでした(下左)。熱海桜はカンヒザクラ(寒緋桜)とヤマザクラの混種で、河津桜より 1 ヶ月ほど早く開花するのだそうです。更に、熱海には別に、エドヒガンザクラとヒマラヤザクラの混種で 11 月下旬に開花する桜があるそうですから、熱海は沖縄などと並んで日本一早咲きを競う桜の花所だったわけですね。「花の命は短いものよ」とも「三日見ぬ間の桜かな」とも言われていますので、あちこちからの「桜咲くらん」情報に錯乱されるところ

から「さくら狩人・桜錯乱物語」と称する花見レポートを書きまくってきたのですが、生まれ故郷の小田原からほど近い熱海の桜事情も知らずにいたのですからとんだ「桜狩人」であつたわいと我ながら呆れています。

近年も、開花時期や色相の変化を求めた人工交配の努力が続けられている様子で、神奈川県南足柄市固有の桜とされる「春めき桜」(別名「足柄桜」: 下右)などは、2000年3月に品種登録されています。カンヒザクラとシナミザクラの交雑種とされ、花の色は、ソメイヨシノよりピンクの色が濃く河津桜よりも色が薄く甘い香りがするのが特徴とされています。ソメイヨシノよりもひとし早く例年は3月中旬に見頃を迎えるのですが、これも「早くも春來たる」の“はるめき感”を与えています。



しかし、変異しやすい特質をもつ桜の歴史に最も大きなインパクトを与えたのはなんといっても「ソメイヨシノ」の出現でしょう。母をエドヒガン、父をオオシマザクラとする雑種で、江戸時代末期から明治初期に染井村(現在の東京都豊島区駒込・巣鴨付近)に集落を作っていた造園師や植木職人達によって育成され、サクラの名所として古来名高い大和の吉野山(奈良県山岳部)にちなんで、「染井吉野」として売りだされてから日本各地の公園、河川敷、街路、学校などに広く植栽されるようになり「これぞ桜」としての地位を得るに至ったからです。単に「サクラ」と言えばソメイヨシノを指すほどになっていますね。歴史的に見ても、かつて「万葉集」の時代から日本で和歌に詠まれていた「サクラ」は、大部分はヤマザクラだったのだそうですが、近世に入ってからソメイヨシノに取って代わられたところが多いのだそうですよ。気象庁も各地のサクラの開花・満開を判断する「標本木」としています。開花事故は地域によってまちまちですが、4月上旬の小学校の入学シーズン中に校門や校庭に植えられたソメイヨシノが満開になる地域も多いようです。

私が今年作ったスマホ写真カレンダー「月々の花」の4月のページに登場してくる桜は、小田原のお堀端で隅櫓とのセットで撮ったもので、これが小田原で生まれ育った者の「桜の原風景」に当るものではないかと思っています。正真正銘のソメイヨシノですが、ご覧になって如何ですかこの花姿は。ピンクが強すぎると華美になって長く見続けられないのですが、ほんのりとしたピンクが漂う花姿は見る者の心に響き安らぎを感じさせてくれます。その上、ソロでも見事なパフォーマンスを見せられるのに、建造物などの姿を浮き立たせるバイプレーヤーぶりを示す献身ぶり。花のもと、花見客ならぬ花飲み客が寛いで時を過ごすことができるのもソメイヨシノならではのことではないかと思っています。



サクラの花言葉に『精神の美』というのがあります。確かに、満開の艶やかな眺めと散り際の潔くもはかない美しさは、ただの表面的な美ではなく、凜とした芯の通った内面からにじみ出る美なのだと思うせるところがありますね。英語の花言

葉の『精神性(Spirituality)』と一脈通じたところがありそうです。また、『優美な女性』という花言葉もあります。「優美」とは「品がある美しさ、品性や態度が良く美しく感じること」を表す言葉です。『優美な女性』とは、単に「姿がきれい」というよりも、「立ち居振る舞いを含んだ美しさ」を備えた女性ですからまさに桜の花言葉という感じがします。

今回も即興俳人の高幡大馬王殿に「桜で一句」とお願いしたところ、「桜の句は多いので、オリジナリティを出すのが難しいなあ」とぼやきながら以下の3句を送ってくれました。

・サムライの 野球が勝てり 花満開 高幡大馬王

桜とWBCの侍JAPANをつなげるところは高幡大馬王殿の発想の素晴らしいところだと思います。「ぱっと咲いてぱっと散るのが桜の醍醐味で、『朝は無事でも夜には命をなくしているかもしれない武士道(日本人のメンタリティ)』と通じるところがあるのも人気の秘密だと思います。」というコメントと相通ずるところがあるのかな。

・「皆同じDNAさ」と 花見酒 高幡大馬王

ちょっと風変わりな句に見えますが「同時に咲いて、同時に散るのは、ソメイヨシノが接ぎ木で増やされ『皆同じDNAだから』と聞いたことがあります。理系の花見は お酒を飲んでも理系の話になります。」というちょいと面白いコメントが付いていました。

・来年も 君と愛でたや 花筏（はないかだ） 高幡不動王

「散り際の美学と言えは花筏です。川面を流れる無数の桜の花びらが筏のように見えるところからできた季語が花筏。咲いている桜もいいですが、散り際もまた、ひととき綺麗です。この花筏という季語は奥さんが教えてくれました。毎年、自転車をこいで、近くの川に花筏を見に行ってます。」というコメントを付けてくれました。ともに桜に親しむナイスカップルの姿がほの見えるようですね。高幡大馬王殿自身が、東芝のエンジニアという原木から外国人相手のツアーガイドに転化した変異株です。今年も外国人グループを各地の桜の名所にご案内して「日本の花」の美しさを堪能させていたことでしょう。

アメリカにも日本生まれの桜「ソメイヨシノ」の名所があります。1世紀以上前の1912年に東京市長だった「憲政の神様」尾崎行雄氏から贈られたもので、首都ワシントンDCのポトマック川の並木をなして見事な花を咲かせ、ここで毎年、「全米桜祭り」が開かれています。その他、欧州、中国、韓国など世界各地に数多くのソメイヨシノが寄贈されているそうです。世界中で広く食用されているサクランボは、明治時代に日本にも入ってきたバラ科サクラ属サクラ亜属の果樹であるミザクラ(実桜)類のセイヨウミザクラ(西洋実桜)の果実なのだそうです。英単語の"cherry"も本来は「サクランボ」が本義だったのでしょうが、国際的に知名度が高まのるにつれて「サクラ」そのものを意味するようになったのかもしれませんがね。それどころか、かつてのTsunam(津波)、Koban(交番)などに続いて、Samurai(侍)とともにSakura(桜)がそのまま英単語として定着しそうな勢いなのですから、「桜」と「侍ジャパン」は、すっかり国力が衰えた日本の価値を国際的に訴求し日本人を元気づける言葉になってきたと言ってもいいのではないかと思います。